テーマ
４　土偶の意味と機能

金子　昭彦

現在定説になっている縄文土偶の用途に関する解釈は、故意破壊、公的儀礼、安産祈願あるいは豊饒（多産含む。再生もほぼ同義と考える）祈願あるいは形代という三つの特徴を持つ。

故意破壊説は、坪井正五郎氏以来の説で（坪井1895）、ほぼ定説となっているが、坪井氏は根拠を示さず、バラバラの破片で出土するなら土器も同じだと中谷治宇二郎氏が批判して以来（中谷1929）、今も一定程度の批判がある。それでも、長い間土偶の出土状況が土器と違って特別であるとする根拠となってきたのは、遠く離れて出土した破片同士が接合する場合がある点だが、これも、近年の研究の進展によって、土器にも認められる現象であることがわかってきた（金子 2008）。筆者は、他遺物と比較できる形で土偶の残存状況を検討した結果、“こわれ易さ”という物理的特性に則っており、これは、例えば同時期の土製耳飾りと同様で（金子 2014）、特別な残存状況とは言えないことがわかった（金子 2003）。

しかし、故意破壊説支持者は全く動じないだろう。故意破壊説を批判する有力な根拠の一つとして、アスファルトや補修孔で修理した土偶が挙げられるが、壊す前に不慮の事故で壊れてしまった場合修理するのだと巧みに言い逃れてきた。修理土偶の遺跡内出現率１割前後というのは、労働災害発生率の百倍以上なのだが。土偶には壊した証拠がないと認める支持者さえいる。掌の上で割り取ったので証拠が残らないと言うのだが、極めて強い握力が必要で、実現可能な行為かどうか。

支持者の最大の根拠は、人形がバラバラに壊れているのは、あってはならない、「殺人」だとする人としてある意味当然の反応なのだろう。批判者が、壊したものでないならなぜバラバラになっているのか対案を示してこなかったことも大きい。

筆者は、後述のように、縄文土偶が個人的に持ち歩かれる存在であったためと考える。持ち歩かれれば壊れる機会は多い。そして、個人的に持ち歩かれれば“愛着”を感じ、例え壊れても容易には捨てられない。個人的なものならば、逆に、完形でも気に入らなければ捨てることもあろう。

二つ目の特徴の「公的儀礼」は、議論の俎上に載らないくらい暗黙の前提となっており、明確に「私的儀礼」としているのは、渡辺仁氏だけである。渡辺氏は、民族例に基づき、狩猟採集民の宗教儀礼は公共的祭儀と私的祭儀に二分され、公的儀礼用の偶像類と私的儀礼用の偶像類では、集落内での使用・保管ならびに最終処理の場所が明らかに違っていて、前者が集落内の特定場所すなわち公共建物ないし施設に限られるのに対し、後者は集落内の住居とその周辺にわたる一般場所であると述べ、集落内の不特定・一般場所から出土する縄文土偶は後者であるとしている（渡辺 2001）。

筆者は、縄文土偶の大きさと形からも私的儀礼にふさわしいと考える。縄文土偶の大多数は、掌に収まる大きさで（高さ 20 ㎝未満）（植木 1990）、自立しない。高さ 50 ㎝を超えたと推測される土偶は、晩期中葉の大型遮光器土偶の一部しかなく、１m近いと推測されるものは岩手県萪内遺跡例しかない。公的儀礼に使われた人物埴輪は、通常高さ 50 ㎝以上あり自立する。銅鐸は、聞く銅鐸から見る銅鐸に変化したそうだが、聞く時期に高さ 20 ㎝程度だったものが、見る時期には 50 ㎝を超えるようになる。衆人に見せるには 50 ㎝は欲しいのだろう。

自立しない土偶をどう扱ったら良いだろうか。紐等の介添えなしなら、寝かせておくしかない。こうした取り扱いは、博物館の展示場を除けば、掌の上に置く以外にふさわしい場所はあまりない。掌に置くという取り扱いは、縄文土偶の大多数が平板で、横から見ると貧弱であるという特徴（金子 2007 : p. 45）にもふさわしい。縄文土偶の多くが脚があるのに立たないのは、立たせる必要がなかったことを意味しよう。こうした形と取り扱いで、まず思い浮かぶのは女児の“お人形さん”である。女児は、ポーズをとらないお人形さんに様々な役割を与え、見立て、お話を作る。

島根県下山遺跡出土の屈折像土偶や千葉県宮内井戸作遺跡出土の大型遮光器土偶のような、製作地から何百㎞も離れた“移入品”の存在も、公的儀礼用より私的儀礼用の方にふさわしい。

三つ目の特徴。形代説は、故意破壊説を前提としており、これが否定されれば成り立たない。また、形代から変化した雛人形の歴史を参照すれば、形代にしては壊しにくく製作に手間がかかっている点もふさわしくない。豊饒祈願説は、故意破壊説を採らない研究者にも支持されている（藤沼 1997）。しかし、食料を初めとする必要品の枯渇やゴミ汚物等の不都合を移動することで解決する狩猟採集民が、豊饒を祈願するだろうか。豊饒祈願説を採る研究者が根拠としてしばしば引き合いに出す“ハイヌヴェレ型神話”は言うまでも無く農耕起源神話である。農耕民は豊饒を祈願するが、その際生殖行為等の性的側面が強調される。淫猥さが感じられるのである。縄文土偶はどうであろうか。腹が膨らんでいたり、乳房が大きかったり、正中線が施されることは良くあるが、性器表現は比較的稀である。そして、その表現を見ても、農耕民族のそれのように、“いやらしさ”を感じることはほとんどない。性的表現があってもいやらしくないのは、縄文土偶が女性のための女性像であるからではないだろうか。

安産祈願説。縄文土偶に時折見られるポーズをとる土偶は、全て、妊娠、出産、子育てに関係するらしいので（小野 1998）、これらに関係する用途に使われた可能性が高い。しかし、大多数の土偶はポーズをとらない。さらに、ポーズをとる土偶の多くが同時期のポーズをとらない土偶と同じ形や文様装飾を持っていることが重要である。すなわち、当時、ポーズをとる、とらないの間で隔絶した違いはなかったらしい。大きくは同じ用途で、その中で妊娠、出産、子育てに特化した用途を担っていたのがポーズをとる土偶であったと考えるのが自然であろう。そうすると、ポーズをとらない土偶も、妊娠、出産、子育てから掛け離れていない用途を担っていたと考えなければならない。妊娠、出産、子育てを担うのは女性である。縄文土偶の女性表現の在り方から、持ち主は女性ではないかと述べた。これは、出土位置からも裏づけられる。渡辺仁氏は、アイヌの生態研究を基に、狩猟採集民の生計活動の場を遠位ゾーン、近位ゾーンに分け、後者は主として女性と子供（階層化社会では老人男性も）の活動領域としているが（渡辺 1990：p.78）、土偶が出土するのは、まさにこの近位ゾーンからである（金子 2007：p.51）。そして、家の中や集落の捨て場だけでなく、その周囲からも出土している（金子 2007：p.52）。これは、近位ゾーンでの活動に土偶を伴ったためと考えることもでき、それならば、安置するより格段に壊れやすくなるだろう。

縄文土偶は、女性の悩みを解決するために使われたのではないだろうか。ポーズをとらないのは、女児の“お人形さん”と一緒で、その時々に応じて様々な役割を見立てられたからであろう。

参考文献

植木　弘　1990「土偶の大きさ」『季刊考古学』第30号　56-59頁　雄山閣

小野正文　1998「ポーズ土偶とその周辺」『土偶研究の地平　『土偶とその情報』研究論集(2)』323-338頁　勉誠社

金子昭彦　2003「土偶はどれだけ壊れているか」『日本考古学』第15号　95-106頁　日本考古学協会

金子昭彦　2007「渡辺仁『縄文土偶すなわち家の神』説の検証」『古代』第120号　29-62頁　早稲田大学考古学会

金子昭彦　2008「土偶破壊説の再検討」『第５回土偶研究会発表資料』　67-76頁　土偶研究会

金子昭彦　2014「土偶と装飾品の比較」『縄文時代』第25号　縄文時代文化研究会

坪井正五郎　1895「コロボックル風俗考　第八回」『風俗画報』(1971年築地書館刊『日本考古学選集第２巻』86-91頁より引用)

中谷治宇二郎　1929『日本石器時代提要』岡書院

藤沼邦彦　1997『歴史発掘③　縄文の土偶』講談社

渡辺　仁　1990「縄文式階層化社会」六興出版

渡辺　仁　2001『縄文土偶と女神信仰』同成社